印象39編-2022年2月の総評に代えて

〇林　　桂〇

＊年間応募締め切り月にあたる２月は、過去最多の5200編を超える作品が寄せられている。当然、佳作に抜く作品も増え、ここに取り上げる作品も39編と今までで最も多くなっている。ここでは印象に残った作品をコメントの対象としている。また、対象の作者も多くなっている。

●翠●（東京都）
きずついた空を
手あてしましたね、

卒業生起立。

＊卒業式で卒業生が起立の号令を受けるのは、卒業証書授与の代表が登壇するとき、卒業生代表が答辞を述べるとき、そして退場のときだろう。これは退場のときの号令だろう。作者は教師だろうか。多くの餞の言葉は単に明るい未来を祝福するものだが、作者は今日ここに至る間の様々な困難を克服したことを祝福しながら未来を祝う。「きずついた空を／手あてしましたね」は深く心に届く。私も教育現場にいたが、こんな優しい言葉は掛けられなかった。

●五味　はこ●（神奈川県）
春霖雨会わなくたってもう平気

＊会わなくても平気なのは友達か家族か。健気な自立の言葉だろうか。

●藤堂游●（愛知県）
この部屋に私を置くのを好む人
がいない時間も家具として立つ

＊家具の独り言。関係と属性の深淵を覗く思いがする。

●つばき柊●（山口県）
学校の帰り道
知らないお店でパンを買う
子犬を拾ったときのぬくもり

＊子犬のためのパンを入ったことのない店で買う。緊急の思いが「ぬくもり」にも表現されている。

●遠海碧●（東京都）
カーテンで
花嫁ごっこしていたの
白い光が溢れる午後に

＊白いレースのカーテンを花嫁衣裳に見立ててくるまって遊ぶ。光が祝福する。一人遊びは豊かな想像力の中にある。

●火鯨研●（熊本県）
火は燃えること以外の
すべてを忘れている

＊確かに。火は燃える以外のことをしようとはしない。至言。

●松下誠一●（東京都）
ファスナーを最大限に引きあげて
なにもできないんだぼくたちは

＊「ファスナーを最大限に引きあげて」は悲しみを表現する所作だろう。たくさんの情報を得ながら、私達はその情報の外側にいて、多くはアクセス権を持たない。

●鈴木　勝也●（京都府）
曼珠沙華寂しさまとう美少年

＊「寂しさまとう美少年」は曼珠沙華の比喩、見立てかとも思われるが、取り合わせとして読んだ方が面白いようだ。他を寄せ付けない寂しいまでの美しさとは。

●鰯山陽大●（山口県）
年長の子は春の陽のような眼で
ジャングルジムのてっぺんにいる

＊ジャングルジムのてっぺんは、公園の特別なポジション。年長の子は、公園の王者のように春の光を浴びている。

●源楓香●（北海道）
見上げれば
誰が降らせる訳でもなく
誰かのために降るような雪

＊西東三鬼に「限りなく降る雪何をもたらすや」がある。雪は何かをもたらすために降っているのではない。そう問う者の中に答えがあるのだろう。

●五味　はこ●（神奈川県）
冴返る無線マウスの腹は青

＊マウスのヘソのあたりは青く光っている。「冴返る」は、その寒色と響く。

●さいう●（愛知県）
しゃぼんだま
めいじんなの、と胸を張る
ぼくのちっこいいもうとのこと

＊小学校低学年までの妹。名人や博士を自称する年齢だ。「しゃぼんだまめいじん」の平仮名書き、「ちっこい」の口語。神経の行き届いた表現が、可愛らしい様子をいきいき伝える。

●長谷川柊香●（宮城県）
初雪を告げる留守番電話消す

＊留守電の主は離れて暮らす家族か。ふるさとに初雪がきたことを知らせる。「消す」には、心理的な距離も反映されているだろう。

●かしな●（茨城県）
もぞもこそ懸念用法サクランボ

＊係助詞の成語「もぞ」「もこそ」は、悪い事態を予想して、そうなっては困る、大変だという思いを表現する懸念用法。受験対策としては必須。「雨もぞ降る」を「雨が降ったら大変だ」と訳せないといけない。代表的な例文は「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることのよわりもぞする」（式子内親王）。「サクランボ」との取り合わせに驚く。一般的な既存の取り合わせならば、「春嵐」とか「春の雪」とか、危ぶまれる気象状況と合わせるだろう。「サクランボ」は飛躍している。懸念用法は、あくまでも受験の知識の内のもので、「サクランボ」は受験勉強の息抜きのおやつを描き、自画像なのかもしれない。しかし、「サクランボ」の花言葉は「小さな恋人」だと知ると、この「サクランボ」には、式子内親王と同じ忍ぶ恋が隠されているのだろうか。果たして孰れであろうか。

●まちりこ●（埼玉県）
受話器からきこえるパンを齧る音
サアカスはもうこの町を出た

＊二行目は想像の中のサーカス。サーカスが去り、一時華やいだ雰囲気の町もまた静かな日常に戻るのだろう。

●立花ばとん●（東京都）
画数の少ない漢字しばれるぞ

＊画数の少ない漢字が寒々と感じられると

いう。すると、画数の多い檸檬も薔薇も憂鬱も鑿も暖かそうに思えてくるから不思議。

●桜咲●（千葉県）
本気中の本気が試される
鬼ごっこと綱引き

＊確かに鬼ごっこも綱引きも本気でやらないと面白くない。いや、本気にさせられる。「本気中の本気が試される」は本質をついている。

●まちりこ●（埼玉県）
あの夜のスプーンの重み
たましいは
どんなものにもくまなく宿る

＊「あの夜」がどんな夜かはわからない。しかし、スプーンの重みにまでその魂を感じた体験には、精神の冴えのようなものを感じる。

●スズキセーホン●（千葉県）
詩人になりたければ
猫を大切にすべし

＊「すべし」は口語ではないが、ここでは少し戯けた表現と捉えた。確かに猫と詩人の相性はいいように思える。ツンデレの猫との心のやり取りは、詩心を育むか。正面から言うと滑稽に聞こえるが、意外に真実を突いているかもしれない。よって「すべ

し」。

●ビスコ●（愛知県）
がん検査のあと
娘が作ってくれた
にんじんのポトフ

＊精一杯母（父）を案ずる思いを表現する娘。ポトフが美味しくない訳がない。

●白野●（新潟県）
紫陽花をいっしょに見れば中学の
校歌みたいに透き通る恋

＊初恋のぎこちなさと淡さと透明感。

●さいう●（愛知県）
わた雲をゆびさしながら

親友と
卒業までのひざしを歩く

＊「親友」がテーマの思春期がある。卒業までの僅かな親友との時間を心に刻む。

●細村星一郎●（東京都）
ブラスバンドが光の繭を突き破る

＊突然のブラスバンドの大きな音量を「光の繭を突き破る」と表現する。「光の繭」には音色も表現されているのかもしれない。

●春町美月●（大阪府）
一人暮らしのおじいさんが
石油ストーブの匂いをつれて
定期検診にやってきた

＊日がな一日一人で暮らす老人の孤独を、「石油ストーブの匂い」に感じ取る感性と洞察力。

●五味　はこ●（神奈川県）
三月はキリンもまつ毛まで眠る

＊キリンも春眠の季節を生きているというのだろうか。「まつ毛まで眠る」はキリンらしい美しい措辞。

●桜咲●（千葉県）
悔しい時は
後ろ向きで
あっかんべー
でべその浮力で
宇宙へとんでけ

＊「後ろ向き」の「あっかんべー」なので、相手に反撃するのではない。自身の気持を解放するのだ。「でべその浮力で／宇宙へとんでけ」の呪文は、作者のオリジナルだろうか。面白い。

●桜咲●（千葉県）
急降下の夢を見て
口から出た心臓を
戻すのに

手間取り
遅刻しました

＊遅刻の言い訳も、ここまでくると真実味はない。ないからこそ許して貰えそうに思われる。もちろん、怒りを倍増する可能性もあるが、この言い訳に笑ってくれる相手なのだろう。

●広田土●（大阪府）
その人の心を射抜きたいのなら
入部希望を弓道部まで

＊高校の新入部員勧誘のポスターの惹句だろう。強くはないかもしれないが、楽しい部活というアピールにはなっているだろう。

●藤堂游●（愛知県）
初雪にお湯かけてまわる朝
生まれるなこんこ
かなしむなこんこ

＊外出のための、車に積もった雪を溶かす作業だろうか。しかし、突然心にわく、二行目、三行目の思い。「こんこ」を付けた唱歌風の響きは深い。

●他人が見た夢の話●（茨城県）
一位とも
三位集団とも遠く
単独二位のランナーの息

＊こういう孤独な位置もあるのだ。

●ビスコ●（愛知県）
浪人が決まった朝の
菜花のスープ

＊最後の発表が不合格となった朝。春の季節野菜の菜花のスープに味がしたかどうか。

●あお●（奈良県）
椿としてのガーナミルクチョコ

＊「椿としての」の比喩が分かりにくい。ただ、真っ赤なガーナミルクチョコレートのパッケージがありありと眼に浮かぶ。

●こはくいろ●（大阪府）
泣いても泣いても私が流れ出ない

＊涙を流すというのは、自分を流し出したいという欲求だったのかと、この作品に出会って感じたことだった。

●火鯨研●（熊本県）
ひかりたつ動物園の外側の
ホモ・サピエンスの
エリアで暮らす

＊動物園の檻の外側の私達も、また違う檻の中の生活を強いられている。

●あお●（奈良県）

雲は水蒸気だから寝転べないよ
と言うだけの簡単なお仕事です

＊アルバイト求人広告の謳い文句のパロディーだろう。こんなバイトがあれば、経験してみたいもの。暮らしの役に立つ仕事とは思えない。詩的な仕事と言ってもいいかもしれない。

　●立花ばとん●（東京都）
キエフ
雨から見たら
　　世界の方が
　降ってきてるんだよ

＊いままさに、違った世界観の衝突がここで起こっている。

　●さいう●（愛知県）
いちにちの
冒険譚を語り終え
松ぼっくりとねむるおとうと

＊松ぼっくりは、冒険の大切な記念品。

　●まちりこ●（埼玉県）
早春の川に流れる白線の
色とりどりの僕らの未来

＊岐阜県斐太高校の卒業行事の白線流しをモデルにして書いたものだろう。白線の「白」と、流す卒業生の未来の彩りを対比して描く。この行事は美しい。

●夏原●（神奈川県）
ほうれん草の
お浸しくらい疲れた、と母

＊母にとって身近なものによる比喩は、説得力がある。